文藝への總督賞制定（１）[[1]](#footnote-1)

　文學總督賞

　香山光郎

朝におけるは、まさに有るべくしていまだ無かつたものの一つである。今の小の朝學制定は、くさるべき善きものであらう。

　大の真最中に學もないなどいふものもなからう。の最中なればこそ、精神は々さるべきだ。それは必ずしも時局に卽したのみを意するものではない。自然や人の美しさは、その國の糧となり力となるものである。小が非時の今日、學を設けた動もそこにあるものとふ。

　を目がけて良き學を造るといふことはへられないにしても、國家が學をこれほど大事に取り上げてくれるんだと、知つたゞけでもしい。學は立に國家奉仕であり、一の筆は、使ひやうによつては一のや、一つの場にらぬ力を出すこともあるであらう。

　唯、學を造る人、ち人がこの、とすべきことがある。それは國家が人に何を要し、何をして居るかというだ。國家は今や一にして唯一の目につて全力を盡して進んでゐる。それは米に打ち勝つて、その政治力と力とを粉し、皇道に基づいた新しいを建てることである。民の一人一人をも國土の一草一木をも動員して、その力をこの目に差向けねばならぬのである。それであるから、學もこの目に、直、間副ふものでなくてはならない。ち、日本な、全のある學が、國家によつてされて居るだ。

　古今來、日本の今日ほど大な時代はなかつた。これほど大なる目のために、これほど全國が一心一となつて、に、に動いた時代はなかつた。この有のが、上手にへられ、表現されたならば、それこど、振古有の文学とならずには措かぬであらう。今般制定されたが、どしどしかういふらしい學の作者にへられんことをる。

1. 1943年1月30日付『京城日報』朝刊2面　第2回は芳村香道、第3回は金村龍濟、第4回は牧洋、第5回は兪鎭午が執筆している。 [↑](#footnote-ref-1)